

保育者養成校の学生の自尊感情に関連する大学コミットメントの重要性 — COVID-19パンデミック時における調査を経て —

戸次佳子

東京福祉大学 保育児童学部 (池袋キャンパス)

〒171-0022 東京都豊島区南池袋1-22-1-3F

(2020年11月30日受付、2021年3月17日受理)

抄録：本研究は、保育者養成校の学生の授業科目への取り組み意欲、大学コミットメント、保育者志望度、保育者効力感および自尊感情との関連を検討することを目的として、2019年に2年生89名と3年生80名(第一次調査)、2020年に3年生70名(第二次調査)を対象とした質問紙調査を分析検討した結果に基づいている。3年生はいずれも保育実習を経験しており、2年生は実習が未経験であった。分析の結果、第一次調査・第二次調査のいずれにおいても、実習を経験した3年生は、保育系授業科目への取り組み意欲が、大学コミットメントを媒介することにより保育者効力感を上昇させ、保育者効力感を媒介することにより自尊感情を上昇させることが明らかになった。本研究は、COVID-19パンデミック期間において、大学の授業が全てオンラインで実施された時期の調査を経て分析されたものであるが、パンデミック時特有の状況を反映した貴重な調査結果が得られたと考える。

(別刷請求先：戸次佳子)

キーワード：保育者養成、授業科目への取り組み意欲、大学コミットメント、保育者効力感、自尊感情、COVID-19

緒言

2020年は、人類にとって未知のウィルスとの闘いの年であった。新型コロナウイルスが発見・報告された当初は、科学の発達したこの時代なのだから、ウィルスの感染経路や特徴が解明されれば、まもなく特効薬やワクチンが開発され通常の生活に戻るものと信じていた人が多かったのではないだろうか。当初、パンデミックを否定していたWorld Health Organization (WHO)も、新型ウィルスによる世界の累計患者数が11万8,381人、死者数が4,292人に至った¹⁾として、3月11日に、「COVID-19」によるパンデミック(世界的な大流行)を宣言し、各国に一層の対策強化を求めた(WHO, 2020)。

一方、これに先立ち、日本政府は2月27日に、全国の小中学校に3月2日から春休みまでの臨時休校を要請し、その後の4月7日には、一都一府四県に緊急事態宣言を発出した。突然の日常が失われたことに戸惑いながら、学校の教職員はもちろん、子育て中の保護者もまた、突然の対応を余儀なくされたことは記憶に新しい。学校の休校に伴い幼稚園の多くは休園となったが、保育を必要とする子どもを預かる保育所は閉めることができず、感染対策を継続しながら保育を続けたところが多かった。100年に一度と言われるパンデミックによる外出自粛期間においても、子どもの命を守る保育士の仕事は休むことなく続けられ、こうした状

況の中、今までにも増して、子どもの命を守る保育の仕事の重要性を改めて感じる年であったと言える。

厚生労働省の調査によれば、2019年10月時点での待機児童の人数は、2018年10月時点に比べて3,376人減少したものの、依然、43,822人の子どもが希望の保育所等に入所できない状態が続いており、そのうちの9割以上に当たる41,270人が3歳未満児であった(厚生労働省, 2020)。厚生労働省は、「保育士確保プラン」を策定し、保育士の量的な確保に力を入れると同時に、保育士の離職率の高さも課題であるとして、保育士の待遇改善にも着手した(厚生労働省, 2015)。

一方で、質の高い保育を担える保育士を育てることは、保育士の量的な確保と共に、あるいはそれ以上に重要な課題であり、保育士の人材育成に取り組む養成校が担う役割は大きい。我々は、保育職に就くことを希望して入学する学生を教育する際に、専門的な知識を修得させると共に、保育を学ぶ自分自身に高い自己肯定感をもたせることが重要であると考えている。「自己肯定感」についての明確な定義はないが、日本セルフエスティーム普及協会(2020)では、「自己肯定感」を、ありのままの自分をかけがえのない存在として肯定的、好意的に受け止めることができる感覚としており、大学生が学習意欲をもち、目標を実現しようとする行動には自己肯定感が不可欠である(破魔ら, 2020)。

そこで筆者らは、学生の保育への意識と自己肯定感²⁾との関連を明らかにすることを目的として、保育者養成大学

の2年生と3年生を対象として、「授業科目への取り組み意欲」「大学コミットメント」「保育者志望度」「保育者効力感」および「自尊感情」を調査し、それらの関連の分析を行った(戸次・池田, 2020)。「保育者効力感」とは、「保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為を取ることができる信念」(三木・桜井, 1998)とされ、短大の2年生では1年生よりも低くなるという結果(田頭, 2016)や、保育者効力感と実習経験との関連が報告されている(浜崎ら, 2008)。「自尊感情」とは、自分に対する肯定的あるいは否定的な態度であり、自尊心が高いということは、自分自身になんらかの意味で価値を認めていることである(Rosenberg, 1965)。学生の自尊感情については、精神的健康と関連があり、自尊感情が低いほど精神的健康が悪化しているとの報告がある(橋本・垂水, 2015)。

戸次・池田(2020)の研究の結果、大学2年生と3年生のどちらの学年においても、保育系授業科目に意欲的に取り組む学生は大学コミットメントが高く、大学コミットメントを媒介することにより、保育者志望度を上昇させることが明らかになった。また、実習を経験した3年生においては、保育系授業科目への取り組み意欲が、大学コミットメントを上昇させ、媒介することにより、保育者志望度および保育者効力感を上昇させること、さらに保育者効力を媒介することにより、自尊感情を上昇させることが明らかになった。この先行研究により、保育を学ぶ学生の自尊感情を高めるためには、大学コミットメントが重要であることが示された。

本研究は、先行研究である2019年の第一次調査(戸次・池田, 2020)と同じ対象グループに、同じ調査項目を用いた質問紙調査を行った縦断的調査である。本研究は、各調査項目のスコアを、第一次調査の2年生および3年生と第二次調査の3年生とで比較し、学年による変化や対象グループによる違いの有無を検討した。さらに、授業科目への取り組み意欲、大学コミットメント、保育者志望度、保育者効力感、自尊感情の関連を、第一次調査の2年生および3年生と第二次調査の3年生とで比較し、学年による変化や対象グループによる違いの有無を検討し、保育者を志望する学生の自尊感情に関連する要因を明らかにするものである。

ただし、本調査対象の3年生は、前述したCOVID-19の影響により、大学内への入構は禁止となり、メールや電話、オンラインによる面談やミーティングなどを活用し、大学教員との情報交換や遠隔授業を約6ヶ月間経験した学生である。第二次調査の3年生は2020年春に2週間の保育実習を経験したが、その後の実習は、COVID-19による感染拡大防止のため延期になっており、第一次調査の3年生の実習経験とは異なる背景をもつ。したがって、本調査の結果に

は、実習経験の影響だけでなく、COVID-19パンデミックによる様々な影響、例えば日常生活の変化から、遠隔授業による大学生活の変化、実習予定変更などによる影響が予想される。しかしながら、このCOVID-19パンデミックによる影響を受けながらも、学び続けた学生たちの調査データを分析し、結果を発表することは、一定の学術的な意義があるものと考えている。

研究対象と方法

1. 対象者と手続き

2019年9月および10月に、首都圏にある4年制の保育者養成大学の2年生89名(男子23名, 女子66名)と3年生80名(男子18名, 女子62名)を対象として、質問紙調査を実施し(第一次調査)分析を行った。調査時、2年生は、未実習の段階であり、3年生は、既に2週間の保育所での実習および2週間の施設での実習、計4週間の実習を終えた段階であった。調査は、調査者が研究趣旨の説明をした上で、同意書と質問紙を配付し、回答後回収した(回収率2年生94%, 3年生93%)。

本研究の調査は、2020年9月に、第一次調査と同じ保育者養成大学の3年生91名³⁾(男子22名, 女子69名)を対象として行った(第二次調査)。第二次調査の3年生は、調査時、COVID-19の影響により全ての科目が遠隔授業となっており、また、保育実習も一部延期されたため、2週間の保育実習の経験のみであった。

調査は、調査者がオンライン上で研究趣旨の説明をした上で、同意書と質問紙をメールにて配付および回収し、70名(男子19名, 女子51名)から回答を得た(回収率77%)。第一次調査、第二次調査共に、質問紙の表紙には、調査目的に加え、調査協力者の回答への自由、回答中断の権利、個人情報取り扱い等、調査倫理に関わる注意事項を明記し、質問項目は同一のものとした。なお、第一次調査は、教室で回収したため無記名としたが、第二次調査は、メールで回収したため記名とした。本研究は、東京福祉大学の倫理審査の承認を得た上で、倫理規定に則って行った⁴⁾。

2. 調査項目

調査は、以下の5つの尺度を使用した。

(1) 授業科目への取り組み意欲

授業科目への取り組み意欲は、専門の科目を、保育系、音楽系、心理系、造形系、運動系に分けて質問項目を作成した⁵⁾。「意欲をもって取り組めたとと思うか」との質問に対して、それぞれに、「5. 非常にそう思う」から「1. ほとんどそう思わない」までの5段階で回答を求めた。科目の「～系」

に関しては、具体的な授業名では示さず、学生自身が考える授業のグルーピングに従って回答すれば良いこととした。

(2) 保育者志望度

学生の保育職につきたい現在の気持ちの強さを、「5. 非常にそう思う」から「1. ほとんどそう思わない」までの5段階で回答を求め、保育者志望度とした。

(3) 大学コミットメント

所属大学への関わりを測るスコアは、小平(2011)の「階層的大学コミットメント尺度(保育版)」の16項目の尺度(4因子「専門職への志向」「専門領域への興味」「大学適応」「職業の継続性」)を用いて求めた。回答は「5. 非常にそう思う」から「1. ほとんどそう思わない」までの5件法で求めて点数化した。本研究では、16項目の平均値を求めて、大学コミットメントとした。

(4) 保育者効力感

保育者効力感は、三木・桜井(1998)の保育者効力感尺度15項目から反転項目と負荷量の低い項目を除いた10項目(田頭, 2016)の尺度を用いて求めた。回答は「5. 非常にそう思う」から「1. ほとんどそう思わない」までの5件法で求めて点数化した。10項目の平均値を求め、保育者効力感とした。

(5) 自尊感情

自尊感情は、Rosenbergの自尊感情尺度10項目(山本ら, 1982)を用いた。回答は「5. 非常にそう思う」から「1. ほとんどそう思わない」までの5件法で求めて点数化した。10項目の平均値を求めて、自尊感情とした。

3. 分析方法

回答は全てデータ化し、間隔尺度として分析を行った。分析には、IBM SPSS ver.26を使用し、*t*検定、およびパス解析を行った。有意水準は5%未満とした。

結果

1. 各項目の学年別平均値

第一次調査の2年生と3年生、第二次調査の3年生における授業科目に対する取り組み意欲(保育系、音楽系、心理系)、大学コミットメント、保育者志望度、保育者効力感、自尊感情のスコアの学年別平均値を求め比較した(図1)。各スコアの平均値を、第一次調査の2年生と3年生、第一次調査の2年生と第二次調査の3年生、第一次調査の3年生と第二次調査の3年生の間で、それぞれ*t*検定を行ったところ、保育系授業科目への取り組み意欲においては、第一次調査の2年生は第一次調査の3年生より5%水準で有意に高く、第二次調査の3年生は第一次調査の3年生より1%水準で有意に高いスコアが認められた(それぞれ、順に $t(167)=2.21, p<.05, t(148)=3.37, p<.01$)。音楽系授業科目への取り組み意欲においては、第一次調査の2年生は第一次調査の3年生より1%水準で有意に高く、第二次調査の3年生は第一次調査の3年生より1%水準で有意に高いスコアが認められた(それぞれ、順に $t(167)=5.18, p<.01, t(148)=3.04, p<.01$)。

また、大学コミットメント、保育者志望度、保育者効力感においては、第一次調査の2年生は第一次調査の3年生より

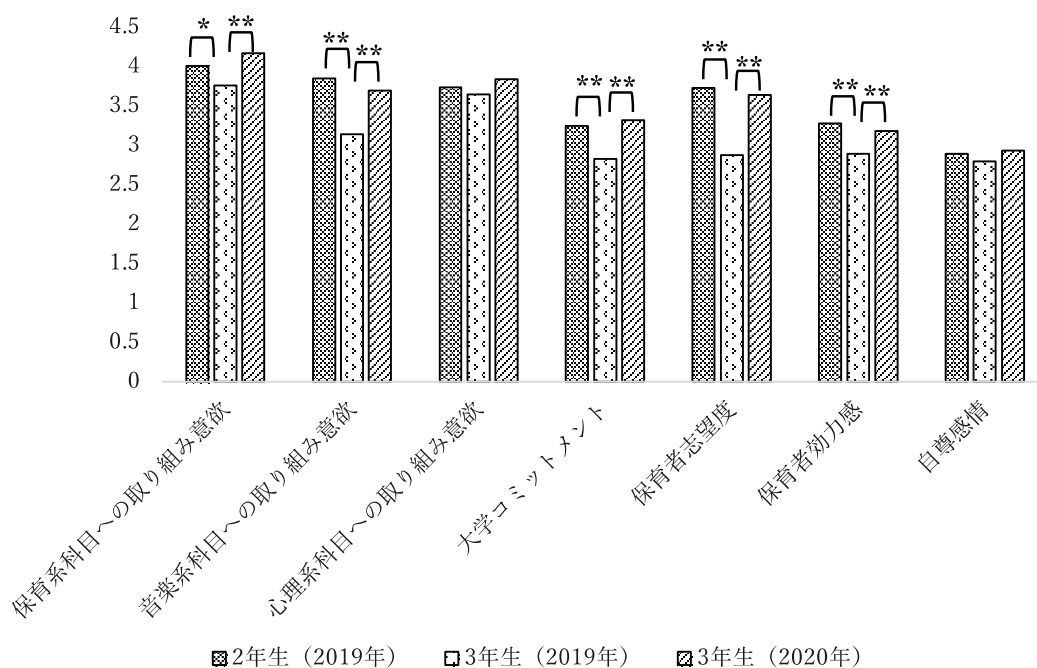


図1. 各調査項目のスコアの学年別平均値

1%水準で有意に高く(それぞれ、順に $t(167)=5.03, p<.01, t(167)=5.12, p<.01, t(167)=5.53, p<.01$)、第二次調査の3年生は第一次調査の3年生より1%水準で有意に高いスコアが認められた(それぞれ、順に $t(148)=4.52, p<.01, t(148)=3.87, p<.01, t(148)=3.69, p<.01$)。心理系授業科目への取り組み意欲と、自尊感情においては、第一次調査、第二次調査のいずれにおいても学年による有意な差は認められなかった。

2. 各質問項目間の関連

質問項目である「授業科目への取り組み意欲」「大学コミットメント」「保育者志望度」「保育者効力感」「自尊感情」間にどのような関連があるのかを検討するために、第一次調査の2年生と3年生、及び第二次調査の3年生それぞれにおいて重回帰分析(ステップワイズ法)を繰り返すパス解析を行った。結果は、パスが示されなかった変数を削除して、結果を図に示した(図2, 図3, 図4)。

第一次調査の2年生では、保育系($\beta = .409, p<.01$)と心理系($\beta = .229, p<.05$)取り組み意欲から大学コミットメントを媒介することにより保育者志望度($\beta = .554, p<.01$)と保育者効力感($\beta = .263, p<.05$)への正のパスが引かれた。

また、保育系取り組み意欲からは、直接、保育者志望度への正のパスが引かれた($\beta = .198, p<.05$)。音楽系取り組み意欲からは、直接、自尊感情へ正のパスが引かれた($\beta = .313, p<.05$) (図2)。

第一次調査の3年生では、保育系授業科目への取り組み意欲のみから大学コミットメントに正のパスが示された($\beta = .542, p<.01$)。さらに、大学コミットメントを媒介することにより、保育者志望度($\beta = .653, p<.01$)と保育者効力感($\beta = .334, p<.01$)への正のパスが示された。また、保育者効力感を媒介することにより、自尊感情への正のパスが示された($\beta = .447, p<.01$)。心理系授業科目への取り組み意欲からは、直接、自尊感情へ有意な正のパスが示された($\beta = .248, p<.05$) (図3)。

第二次調査の3年生では、保育系($\beta = .453, p<.01$)と音楽系($\beta = .247, p<.05$)の授業科目への取り組み意欲から大学コミットメントに有意な正のパスが示され、さらに、大学コミットメントを媒介することにより、保育者志望度($\beta = .724, p<.01$)と保育者効力感($\beta = .287, p<.05$)への正のパスが示された。また、保育者効力感を媒介することにより、自尊感情への有意な正のパスが示された($\beta = .408, p<.01$) (図4)。

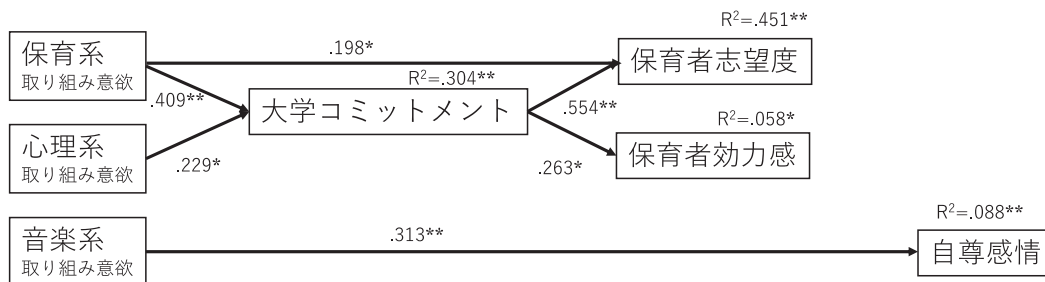


図2. 調査項目間のパス解析の結果(2年生<第一次調査>)

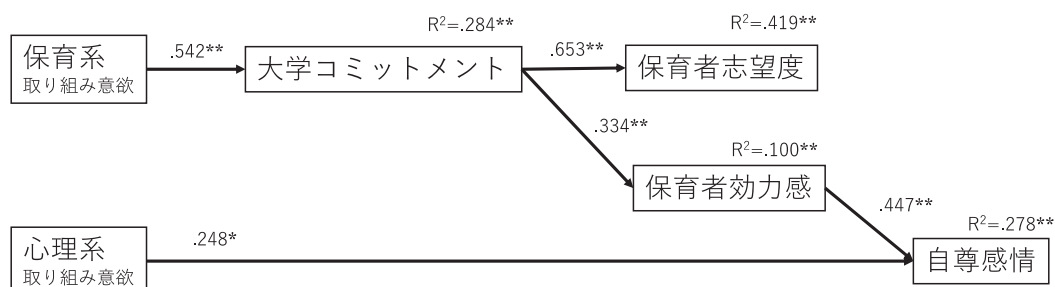


図3. 調査項目間のパス解析の結果(3年生<第一次調査>)

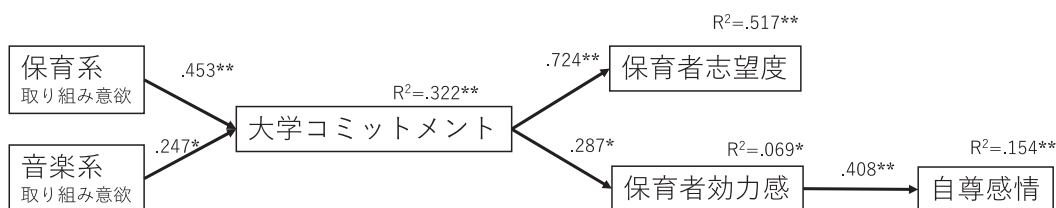


図4. 調査項目間のパス解析の結果(3年生<第二次調査>)

考察

1. 各項目の学年別平均値

(1) 授業科目への取り組み意欲について

第一次調査では、4年制大学の3年生における保育系、音楽系授業科目への取り組み意欲の平均値が、2年生よりも有意に低かった。一方、本研究の第二次調査における3年生の授業科目への取り組み意欲は、第一次調査の2年生時のスコアと有意差が認められず、学習意欲の低下が認められなかった。保育系科目、心理系科目においては、有意差は無いものの、3年生で2年生よりスコアの若干の上昇が認められた。このように、2年生から3年生にかけて、学習意欲が維持されている学年が認められたことは、本調査から得られた貴重な結果である。

第二次調査において、授業科目への取り組み意欲が3年生でも高いままに保たれた要因として、以下の二つの可能性が考えられる。一つは、第一次調査における2年生が、第一次調査における3年生よりも元々高い学習モチベーションをもった学年グループであったという可能性である。第一次調査では、対象者の異なる2年生と3年生を対象とした横断的研究であったため、学年による差であるのか、対象者による差であるのかは明らかではなかった。本研究結果は同じ対象者を調査したことによって、学年が上がっても授業科目への取り組み意欲が低下しないグループがあるという結果が示された。

二つ目の要因として、COVID-19パンデミック時という今年度特有の条件が学生のモチベーションを高いままに持続させたという可能性である。研究対象と方法で前述したように、本調査の前の半年間、対象大学における授業は全て遠隔授業となり、学生は、それぞれが政府の発出した緊急事態宣言下⁶⁾の不安な状況の中で、オンライン画面に向かって授業を受けるという状況が続いた。このような状況下であったからこそ、学生は、外出もままならない中で、新しい授業形態に緊張感をもって臨み、結果的に、そのことが授業科目への取り組み意欲を高いままに保つ要因として働いたという可能性である。また本調査校では、学期中、各授業に最低二つのレポート課題が課せられたため、対象の学生は、日々の授業を受けながら、それぞれの提出期限に合わせてレポート作成と担当教員へのメール添付による提出に取り組んだ。このことが、結果的に授業科目への取り組み意欲として学生自身の自己評価につながったのではないかと考えられる。大学生生活折り返し地点の3年生頃になると、平常時であれば大学生生活に慣れてくる時期であり、また、実習が始まり取り組むべきことが多くなる上に、保育への職業意識も現実化してくる中で、本格的に自分の進路を熟慮

する時期でもある。そのような中で、本来ならば、専門の科目の授業に集中して取り組むべき時である一方で、友人との交流やアルバイトなど、授業に集中できない様々な要因が入り込んでくる時期とも言える。しかしながら、パンデミックは、実習の延期や授業形態の変化をもたらし、レポート課題の作成や提出を増加させた。このような自宅学習時間の増加が、結果的に学生の授業取り組み意欲に良い影響を与えたのかもしれない。

もしそうであるならば、このことは、今後の大学における学生の授業取り組み意欲を維持するための方策のヒントとなりうるであろう。例えば、大学での取り組みとして、折り返し地点である3年生ごろから、科目によって遠隔授業を導入する、また、オンデマンドの授業を配信し、大学間連携による学びの相互交流を展開するなど、新しい授業形態で変化や緊張感を持たせることは、学生の授業科目への意欲を維持・増進させる方策の一つとして考えられる。それぞれの大学がパンデミックで経験した多様な授業形態のあり方を参考に、学生の実態に合わせた授業形態の多様化といった授業改革を行うことも、今後、検討に値するものと思われる。

一方で、パンデミックが収束し平常の大学生生活に戻った際にも、折り返し地点における授業形態の変化が学生の授業科目への取り組み意欲を維持させる方策となりうるかという点については、本研究のみから論じることには限界があり、今後の発展的な調査研究や議論が必要であろう。

(2) 大学コミットメント、保育者志望度、保育者効力感

第二次調査の3年生は、大学コミットメントや保育者志望度、保育者効力感においても、2年生時と同様に高いスコアを維持することができた。前述したように、対象の学生らは、大学構内に入らず、オンラインでの授業や教員とのやりとりが続いていた。また、実習も2週間の保育所での実習のみ実施されたものの、3年生春に実施される予定であった2週間の施設での保育実習が延期となっている状況であった。このような不安を抱えた状況下では、大学コミットメントや保育者志望度、保育者効力感も低下するのではないかと筆者の予想であったが、結果は2年生時と変わらぬスコアで、有意差は認められなかった。これに対しても、授業科目への取り組み意欲と同様、以下の二つの要因が考えられる。

一つは、授業科目への取り組み意欲と同様、第二次調査の対象学年特有のモチベーションの高さによるものである。そして、二つ目は、パンデミックにより、アルバイトにも大学にも行かれない自宅待機の日々で、大学教員との相談や情報交換が普段よりも多くなったこと、人と繋がる手段である授業がオンラインで続けられたことが、図らずも、大学に

所属しているという意識をより高め、学生が自分と向き合い将来について考える時間が増えたという可能性である。

一方で、多くの学生たちが、パンデミックによってこれまでの当たり前の日常が壊され、不安な日々を過ごしたことは紛れも無い事実である。学生たちが受けた精神的なダメージを今後修復しつつ、将来を前向きに考えられるようサポートしていくのも大学教員にとって重要な課題である。

2. 各質問項目間の関連から

2019年(第一次調査)2020年(第二次調査)の2年に亘る調査結果により、共通して保育系授業の科目への取り組み意欲が大学コミットメントを上昇させ、大学コミットメントを媒介することにより、保育者志望度および保育者効力感を上昇させるという結果が示された。

さらに、実習を経験した第一次調査と第二次調査の3年生では、保育系科目への学び意欲が、大学コミットメントと保育者効力感を媒介することにより、自尊感情に影響するという結果が共通して確認された。このことは、3年生においては、保育実習の介入により、実習に向けた保育系科目での様々な学びに加えて、現場での実践的な学びを体験することで、保育者としての効力感が変化し、さらに、職業として保育士を目指す自分自身の自尊感情に影響を及ぼす可能性があることを示唆している。

さらに、パンデミック下で実施された2020年の3年生の調査では、自尊感情への関連は、保育系及び音楽系科目への学び意欲から大学コミットメントと保育者効力感を媒介してのみ認められており、学生の自尊感情を高める要因として、大学コミットメントの重要性がより一層示されたと言える。

結論

本研究調査により、保育者を志望する大学3年生の学生において、授業科目への取り組み意欲、大学コミットメント、保育者志望度、保育者効力感、自尊感情は、COVID-19パンデミック時のオンライン授業においても維持され、自尊感情は、保育系授業科目への取り組み意欲とそれに伴う実習経験を前提として、保育職への興味関心や就職希望、そして大学への適応といった「大学コミットメント」と強く関連することが示された。本研究の結果から、保育者養成校において、各学生が自尊感情を高く持ちながら保育者として高い専門性を身につけるよう学び続けるためには、各学生の大学コミットメントを高めることが重要であることが明らかになった。この結果は、高い専門性を身につけた自己肯定感の高い保育士を養成するためには、学生の大学

コミットメントを高めるための養成校の教員の取り組みや工夫の重要性を示していると言えよう。例えば、保育者養成校の教員においては、学生が保育系学びに意欲的に取り組めるようなカリキュラムや教育指導法を工夫すること、学生が大学生生活に適応して、将来保育者となるための見通しが持てるようなアドバイスや援助を、丁寧かつ積極的に続けること、このような取り組みが学生の自尊感情を高めることに有効であるかもしれない。

一方、本研究は一つの大学の二学年の調査によるものであったこと、また、COVID-19パンデミック時における調査を経て分析されたものであり、授業形態が大きく異なったことや、実習経験の一部延期、調査時の回収方法や記名法の違いなど、調査結果を左右する様々な要因が結果に影響していることに、研究の限界があった。しかしながら、一方で、平時には調査できないCOVID-19パンデミック時における遠隔授業を経て分析されたものであり、パンデミック時特有の状況を反映した貴重な結果が得られたものと考えられる。

COVID-19は、いずれ収束する時期が来るであろう。しかし、このような新しいウィルスの出現は近い将来にまたあるかもしれない。こういった自然災害や人的災害の発生の可能性を考えれば、どのような状況下においても、学生の学びを止めないための方策、すなわち今回経験した授業形態の多様化を、元に戻すのではなく、さらに発展させて前に進めていく必要がある。また、COVID-19は、世界的に流行した疫病であるからこそ、グローバルな視点からの教育の変革推進が可能な時期でもある。場所や時間を問わず世界中の誰もがつながって学べるオンライン授業は、“持続可能な開発のための教育 Education for Sustainable Development” (文部科学省, 2020)にも通ずるところがある。

今後も、本研究結果を主軸として、学生の自尊感情に関連する大学コミットメントの重要性について引き続き研究していく所存である。

注

- 1) 約8ヶ月半経った現時点(2020年11月29日)での、累計罹患者数は61,654,661人、死者数は1,444,596人にまで達している(WHO <https://covid19.who.int> 2020.11.29 検索)。
- 2) 戸次・池田(2020)の研究では、保育者効力感および自尊感情を「自己肯定感」の指標として、調査研究を行なったが、本研究では、自尊感情に焦点をあてて議論している。
- 3) 本研究調査の3年生は、2019年の第一次調査時の2年生と同じ学年グループであるが、記名式のマッチングを行ってはいないため、対象者の中には一方の調査にのみ参加した学生もいる。

- 4) 研究倫理審査の申請においては、調査は記名式で行うことで審査を通過している。
- 5) 5科目(保育系、音楽系、心理系、運動系、造形系)の調査を行ったが、本研究における分析は、すべての学生が履修している3科目(保育系、音楽系、心理系)で行った。
- 6) 新型コロナウイルス特別措置法に基づく措置で、本研究調査を実施した大学の所在地では、4月7日から5月25日まで、感染拡大防止のため、外出の自粛や学校の休校、人が集まる施設の使用制限が要請された。

謝辞

本調査にご協力いただいた学生に感謝申し上げます。池田幸代氏には、調査に関するご助言をいただきました。感謝申し上げます。

文献

- 戸次佳子・池田幸代(2020)：保育者養成校における学生の保育への意識と自己肯定感に関連する大学コミットメントの重要性。東京福祉大学・大学院紀要 **10**, 59-66.
- 破魔幸枝・浅枝麻夢可・原久美子(2020)：青年期における自己肯定感と対他者との意識に関連する要因の検討。神戸常盤大学紀要 **13**, 93-99.
- 浜崎隆司・加藤孝士・寺蘭さおり・荒木美代子・岡本 香(2008)：保育実習が保育者効力感、自己評価に及ぼす影響—実習評価を媒介した因果モデルの検討—。鳴門教育大学研究紀要 **23**, 121-127.
- 橋本 翼・垂水直樹(2015)：保育者志望短期大学生のメンタルヘルスに関する探索的研究：UPI(学生精神健康調査)と自尊感情との関連及びUPIの継時的分析を通して。近畿大学九州短期大学研究紀要 **45**, 69-82.
- 小平英志(2011)：大学適応の階層性に関する検討：保育系短期大学生を対象に。日本福祉大学子ども発達学論集 **3**, 49-69.
- 厚生労働省(2015)：「保育士確保プラン」の公表。 <https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11907000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Hoikuka/0000070942.pdf> (2020.11.29 検索)。
- 厚生労働省(2020)：令和元年10月時点の保育所等の待機児童数の状況について。 <https://www.mhlw.go.jp/content/11922000/000661459.pdf> (2020.11.29 検索)。
- 三木知子・桜井茂男(1998)：保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響。教育心理学研究 **46**(2), 83-91.
- 文部科学省(2020)：持続可能な開発のための教育(ESD)。 <https://www.mext.go.jp/unesco/004/1339957.htm>. (2020.11.29 検索)。
- 日本セルフエスティーム普及協会(2020)：自己肯定感とは？。 <https://www.self-esteem.or.jp/selfesteem/> (2020.11.15 検索)。
- Rosenberg M. (1965)：Society and adolescent self-image. Princeton University Press, Princeton, NJ, p.340.
- 田頭伸子(2016)：保育者効力感の発達の变化について：保育専攻短大生と保育者の比較。広島文化学園短期大学紀要 **49**, 29-33.
- WHO(2020)：WHO Coronavirus Disease (COVID-19) Dashboard。 <https://covid19.who.int> (2020.11.29 検索)。
- 山本真理子・松井 豊・山城由紀子(1982)：認知された自己の諸側面の構造。教育心理学研究 **30**, 64-68.

Impact of University Commitment on Student's Self-esteem in a Preschool Teacher Facility: Survey During the Period of COVID-19 Quarantine

Yoshiko BEKKI

School of Childcare and Early Childhood Education, Tokyo University
and Graduate School of Social Welfare (Ikebukuro Campus)
1-22-1, Minami-Ikebukuro, Toshima-ku, Tokyo 171-0022, Japan

Abstract : The purpose of this study is to clarify the relationships among “learning motivation for each subject”, “university commitment”, “aspiration for a preschool teacher”, “preschool teacher efficiency”, and “self-esteem” of students in a preschool teacher facility. To this end, we have carried out a questionnaire survey for 89 second-year students, and 80 third-year students in 2019. The same questionnaire survey has been additionally conducted for 70 third-year students in 2020. All the third-year students have experienced a childcare training whereas the second-year students have not. According to the path analysis among the variables in each grader, it is shown that the learning motivation for “childcare” enhances the “preschool teacher efficiency” via the “university commitment”, which leads to a further enhancement of the students' “self-esteem” of third-year students in both 2019 and 2020. Finally, it should be pointed out that this study is significant because the questionnaire results might be substantially influenced by the peculiar situation during the COVID-19 quarantine when all the university courses are provided online.

(Reprint request should be sent to Yoshiko Bekki)

Key words : Preschool teacher training facility, Learning motivation, University commitment, Preschool teacher efficiency, Self-esteem, COVID-19